

令和 5 年 10 月 30 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04679

研究課題名（和文）国際モビリティの意義：日本におけるモンゴル人留学生に関する総合的研究

研究課題名（英文）"Understanding International Mobility: A Comprehensive Exploratory Study of Mongolian Students' Experience of Studying in Japan"

研究代表者

ミヤグマル アリウントヤ（Myagmar, Ariuntuya）

早稲田大学・地域・地域間研究機構・その他（招聘研究員）

研究者番号：70752616

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、留学を国際モビリティの一環として捉え、日本に留学したモンゴル人（元）学生の留学経験を調査し、分析の新たな枠組みを模索した。アンケート調査、インタビュー調査、フォーカスグループに加え、国際モビリティの動向や留学政策のレビューを通じて、彼らの来日理由や目的、日本留学の成果や困難、その要因等について総合的に検討した。その結果、モンゴル人の留学目的には、教育段階別によっていくつかのグループ間で有意な差があることがわかった。目的設定、運用言語、コミュニケーション、経済状況は相互的に働きかけ、留学過程において異なるパターンを生み出している重要な要因である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、モンゴル人留学生に関する研究として、これまで注目されてこなかった様々な教育段階を対象に、研究手法の観点からも総合的かつ構築的アプローチを用いた日本初の試みである。留学のパターンは、留学生自身による主体的な振り返りだけでなく、留学希望者にも参考となる。送出国や受入国の両方にとって効果的な計画や施策の改善にも寄与する可能性がある。また、こうして越境留学は活発に進んでいるものの、モンゴルを含む（非漢字圏）国や地域については、留学の効果やモビリティの意義に関する研究が不足しており、今も研究が必要である。したがって、パターンは、この研究課題を克服するための新しい枠組みとして示唆的である。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explore study abroad experiences of (former) Mongolian students in Japan, considering study abroad as a part of international mobility to construct a new analytical framework. Through questionnaire surveys, interviews, focus groups and literature reviews on policies and trends of international mobility, this study comprehensively examined their reasons and purposes of coming to Japan, achievements, difficulties, and factors behind those results. The results show that, for Mongolians, there is a significant difference in the reasons and purposes of studying abroad among several groups by their study level. It was clarified that purpose setting, language usage, communication, and economic situations were mutually important factors that interact with each other, resulting in different patterns in the study abroad process.

研究分野：比較教育学、高等教育関連

キーワード：高等教育のモビリティ 留学経験 日本留学 モンゴル人留学生 アンケート調査 インタビュー調査
フォーカスグループ 留学のパターン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

一國に留まらないヒト・モノ・カネ・情報のグローバル化が進展している中、海外を渡る留学生の移動は、強くその影響を受けながら拡大した。「30万人計画」を背景に、より良い質の教育を求めたモンゴル人留学生も増加し、多様化した。

日本は、モンゴル国にとって、1990年代から主要な支援国として認知度が上がり、モンゴル人留学生のホスト国としてもその位置が高く、2010年代に上位5位の位置にある。

ところで、モンゴル人留学生の国際的移動や留学実態等についてはあまり知られていない。かくして、日本におけるモンゴル人留学生は、総人数として外国人全留学生の中では少ないように見える。だが、モンゴル国からの日本留学は1970年代に始まり、在日外国人/百数各国の中、モンゴル人留学生が本研究の申請当時11番目に多かった。留学生は、留学という営みの主体者であり、留学への期待が高いとの観点からみれば、さらに非漢字圏諸国からの留学生増加との観点からも留学効果の向上等の側面においては、日本におけるモンゴル人留学生は研究の対象として資するのである。

実践上は、国際モビリティの意義ないし海外留学の効果については、送出し主要国に関する研究が代表的で、ここ20年間に肯定的に捉えられている。越境留学は活発化されつつあるが、モンゴルのような関連研究が浅い国々に関しては、果たして主要国の議論が当てはまるのだろうか。また主要国研究と同様な手法でアプローチできるかどうかは曖昧で、注意を払う必要があった。

本研究では、こうした観点から、受入れ先である日本での統計データを参考にし、モンゴル人留学生の名簿がないこと、教育手段別や運用言語などにおいて多様なモンゴル人留学生が増えていること等を鑑み、本研究を着想した。

2. 研究の目的

本研究は、国際モビリティ研究の一環として、モンゴル国出身の(元)留学生に着目し、彼らが留学という営みの主体と同時に対象者であるとの観点から、彼・彼女らの留学経験について、総合的かつ構築的なアプローチに基づき分析するものである。具体的に、国費ないし私費で日本の大学をはじめ日本語学校等に在籍中の、または卒業した多様なモンゴル人を対象に、留学過程における結果とそこでの諸要因を探ることを目的とした。最終的に、留学個々の留学効果を図るための、送出しと受入れの国家・機関レベルの政策立案や実践向上に貢献しうる研究の新たな分析枠組みを構築し、その提示を試みた。

3. 研究の方法

研究手法としては、1)アンケート調査、2)インタビュー調査、3)フォーカスグループを用いた。上記1)と2)の実施過程では、文献ないし現地調査を用い、国際モビリティの動向やモンゴルでの留学政策・取り組み等のレビューを行った。その際、各調査は、モンゴル語(設問項目、音声録画)、データの加工と分析はモンゴル語・日本語・英語、研究成果の報告は、主に日本語と英語で行った。

それぞれの研究手法については、以下の通りである。

1) アンケート調査：

様々なタイプの留学生の全体像及び特徴を把握するため、2017年11月にアンケート調査の設計にあたる予備調査、2017年12月から2018年3月(追加調査は6月)に定量的サーベイ調査を行った。前者は紙媒体形式で、後者はオンラインにて実施した。調査対象者は、高校以上の学歴を有する者で、留学を主たる目的として1年以上、日本の大学、大学院(修士や博士課程)、短期大学、高等専門学校、専修・専門学校、日本語学校におい

て「留学」資格のもと在籍している、または卒業後5年以内の本留学生の203名であった。質問票の作成にあたっては、JASSOの私費留学に関するアンケート調査等を参考にし、属性、運用言語や海外経験、留学の理由と目的、その達成、留学過程での結果と困難等のテーマ・カテゴリーから構成する4件法設定の項目を取り入れた。参加の呼びかけ・募集は、在日モンゴル人留学生や社会人等のネットワーク、フェイスブックを通じて公開した。データ収集は、グーグルフォームによる直接的かつ自動的に回収できる設定を用いて行い、データ加工と分析の際にSPSSを用い、ノンパラメトリック検定(クルスカル・ウォリス検定、Kruskal-Wallis test)を行った。

2) インタビュー調査:

アンケート調査で生じた諸要因を探り、そこで普遍的ないし個別の文脈(パターン)があるかどうかを検討するために、まず、現役及び卒業生の5名に対して事前聞き取り調査を行った。留学過程での留学目的の変化、成果や困難の諸要因について、属性が異なる留学生の様々な文脈を考慮しつつ、テーマの範囲や質問の組み立て等を定めるためであった。この段階を踏まえ、アンケート調査では違いが明確となった日本語学校と博士課程の在籍者(計5名)に焦点を当て、モンゴル語での半構造インタビューを開始した。さらに、留学の成果と学びの背景等をより正確に捉えるために対象者の範囲を学部生、修士課程の院生へと段階的に広め、最終的に、高等専門学校や専門学校、短期大学を含めた25名に絞った。準備作業には、参加者一人一人に書面上の説明及び依頼文を送り、合意が得られた場合、インタビュー可能な場所と日程の調整を定めた。コロナ禍までは対面インタビューを行っていたが、コロナ禍によりオンランに移り、主にZoomを利用した。録音内容のテープ起こしはモンゴル語で行い、整理・加工・分析・解釈の際にエクセルと定性ソフトのNVivoを用いて、オープンコーディングとツリー構造を順次に行った。

3) フォーカスグループ:

インタビュー調査の結果を精査し、普遍的で文脈的な諸要因がいかなる留学の成果や結果をもたらしているかにあたって再検討を行うために、様々な留学生を代表するうえ、アンケートないしインタビュー調査に参加した(元)留学生10名を集約し、Zoomオンランを通じてディスカッションを実施した。準備段階では、インタビュー調査と同じく、参加者全員に対してフォーカスグループの意図及び実践方法について説明文を送った。参加賛同を表した対象者にさらにインタビュー調査から得られた留学パターンについて紹介ファイルを用意した。プレディスカッションを設け、パターンについて説明及び確認を行ったうえで、参加者一人一人が自分の経験から照らし合わせた場合、当てはまりそうなパターンがあるかどうかを質問し、当てはまらない回答も念頭に、再び本調査への参加の有無を確認した。自分を同じパターンだと判断した参加者同士を同じサブグループとし、フォーカスグループを2回行った。1回目のディスカッションでは、同じパターンのサブグループ同士は、自分が何故そのパターンだと思っているかについて確認しあった。2回目は、日本留学でより高い成果をおさめるためにどのような条件ないし準備をすれば良いのかについて、もし再び日本に留学した場合との設定のもとディスカッションが行われた。1回目と2回目の両方の場合、ディスカッションは、まずサブグループ内で行われ、最後は各グループによる整理・まとめが参加者全員に紹介され、説明・コメント・疑問点を提示する形で展開された。

4. 研究の成果

1) アンケート調査からは、モンゴル人留学生の全体にとって、日本への留学の主な理由(14の選択肢)は、日本の技術発展の魅力、日本で学びたい専攻分野があったこと、日本の教育の質がよいことであり; 留学の主な目的(9の選択肢)は、自己表現・個人的な成長、最終的に学位取得のためであり、さらに日本の技術や文化から学んだことをモンゴルへ導入すること等が挙げられる。

他方では、在学教育段階別にみるとグループ間で有意義な差が認められた。特に、日本語学校及び博士課程の留学生の間では、留学の理由に関して、前者にとっては日本では留学ビザでアルバイトできること、後者にとっては奨学金等経済的なチャンスができたこと、日本の教育機関が受け入れてくれたことが最も重要な理由として位置付けられている。留学の目的に関しても、日本語学校の学生にとっては日本語を学ぶこと、日本で就職することは、他のグループより関心が高いが、博士課程の学生にとってこのような関心は最も低く、むしろ新しい研究方法や知識を学ぶことが最重視されていることが挙げられる。

2) インタビュー調査を通じて、全体的に留学の理由は変わっていないが、留学の目的は実現されるだけでなく、変化したり、薄れたりすることが明らかになった。さらに、成果は、何らかの困難を乗り越えた上での結果であるが、想定していなかった別の目的設定や新たな過程につながっていることが挙げられる。

また考察を通してみえてきたのは、留学の当初の意図から留学過程を終えるまでには、留学の理由は留学前と変わらないが、当初の目的が達成できたタイプと達成できなかったというタイプが存在し、それぞれもまたいくつかがパターンとして分類できるということである。

まず、目標達成できたタイプは、留学当初から学位取得のため来日した学生が多く、達成できなかったグループは、日本語学校からスタートした学生の方が多いことが挙げられる。さらに、目標達成できたグループには、留学の成果が早い段階で得られたタイプⅠ、時間かかったというタイプⅡ、苦労はあったが形として達成できたタイプⅢがあった。

タイプⅠの特徴は、留学の目的が明確かつ達成する意思が強い上、運用言語や経済上は不安が全くなく、学習面でも苦労したことが特になくというものである。このタイプを調査者は「ハイウェイ」パターンと名付けているが、このタイプは、留学前までに自分が持っていた情報や能力や経験（内発的要因）は、留学への意欲的な意識、さらに留学の目的設定にもつながり、留学中にも良い環境に恵まれ、教員や同級生とのコミュニケーションも順調で、学習面でも自己実現としてもラッキーだったと認識している。

タイプⅡは、タイプⅠと同じく、留学の動機と目的の認識が高く、金銭面や言語能力等においては苦労が特になかったケースである。だが、留学過程に人間関係ないし学習関係ないし生活環境上で何かしら悩みや問題に直面し、振り返ってみれば、その解決に時間がかかってしまったという難点がある。大きな問題はなく、無事に着陸するようなこのタイプを「一般道路」パターンという。

そして、タイプⅢは、留学当初の意図と希望が薄れてしまうが、最終的に形としてとりあえず目的達成できた場合である。このタイプは運用言語面では問題はないものの、金銭的な負担が大きい上、希望した大学に入学する（就職に就く）ことができず、そのうえ戻る道（帰国）がないため、学習環境ないし教育の質等に対して満足できないままでとりあえず着陸した点が特徴的である。パターンとして「遠回り道路」と呼ぶが、このパターンは高校を卒業し、日本で大学教育を受けようとした留学生や大学卒業後まもなく日本の大学院で専門知識や能力を伸ばそうとする人が、分野を変えて新たな分野領域の教育を受けたいという大学卒業生に多く見て取れる。

一方で、目標達成できなかったタイプとは、運用言語が上達できず、経済状況も厳しく、当初の意図が実現できなかったという共通点がある。そのような中、当初の意図を全く諦めているとは言えず、機会があれば目的に着陸したいが、現状としてはできないため、別の選択肢を選ぶというタイプⅣがある。このパターンは、モンゴルで既に高等教育を受け、さらに社会人として経験のある留学生にみられる。路線を変えたようなケースなので、「分かれ道」パターンという。加えて、留学目的が明確かつ高い一方で、使用言語、コミュニケーション、経済といった状況は有利ではなく、その問題を留学中に解決できないため、結果として帰国という選択に至ったケースが、目的達成できなかったタイプⅤに含まれる。このパターンを「難路」パターンと名付ける。

どのパターンも、留学の成果ないし困難の要因は多数かつ複雑だが、上記に触れた通り、留学生の目的達成には、運用言語能力と授業料等に必要収入源・金銭的な余裕、受入れ機関での学習環境の整備や正確な情報提供や教職員の指導、クラス内外のコミュニケーション、留学生自身による留学目的の認識、意志、情報収集力等があわさって大きな影響を与え、次の道への土台となっている。

3) フォーカスグループでは、以上の結果をクロスさせ、留学過程のパターンの文脈性ないし普遍性について、多様なモンゴル人留学生自身の議論を通して再確認した。

パターンⅠ(ハイウェイ)、パターンⅣ(分かれ道)、パターンⅤ(難路)に関しては、どのサブグループも一貫して賛同した。

一方で、どのパターンにもフィットできないが、二つのパターンが交差したケースもありうるとの議論が行われた。一つは、留学期間としては長く、日本語コースから高専へ進学し、そして大学学部課程を経由して大学院を終了したというケースである。留年や休学経験がなく、学位取得という留学前までの目的も段階的に達成された。よって、パターンⅠに当てはまりそうだが、留学期間が長かったため、ハイウェイパターンのようにスピーディーでもなかった。どちらかということ、普通に勉学し、留学生活を送ってきたので、一般道路のⅡに近い。しかし、Ⅱのように何かしら一時的な苦労や困難に直面したことがなかった。従って、パターンⅠとⅡの間に入りそうなケースとしての位置付けができそうとの解釈が与えられた。同様に、パターンⅢでもなく、またパターンⅤでもないケースがあった。当事者自身は、日本語学校を経由し、大学学部課程に進学したが、中退し、帰国した。だが、Ⅴのように、運用言語とコミュニケーション関係では不満がなかった。どちらかということ、Ⅲに近い。それでもやはりパターンⅢのように、日本には滞在し続けていない。

さらに、ハイウェイパターンⅠが魅力的だが、日本での多くのモンゴル人留学生にとって、パターンⅢのように留学の道を遠回りしたり、あるいはパターンⅣのように分かれ道に路線を変えたり、最もパターンⅤのように難路に乗ったりしないで、留学の意図や目的を実現するために、個人として注意を払う内発的要因、教育機関や国レベルでは改善が望ましい外発的要因について議論しあった。

加えて、ここで共有されたのは、それぞれのパターンに対して、参加者以外の学生が反射的に反応するように、モンゴル人ネットワーク等を利用し、さらなるディスカッションを行うという提案である。それぞれのパターンを議論の素材として生かせるために、それぞれ約2分分量の5つの動画を作成した。課題として残ったのは、コロナ禍により大きく見直せざるを得なかった計画を再び振り返り、情報空間と同時に研究ツールとしてソーシャルメディアをいかに活用するか、その可能性やリスクの両方を再検討することである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Myagmar Ariuntuya	4. 巻 1
2. 論文標題 An Overview of the Trends in Global Student Mobility: In Light of Characteristics of International Student Policy in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Higher Education	6. 最初と最後の頁 245-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Myagmar, Ariuntuya
2. 発表標題 Trajectories of Studying Abroad: Understanding experiences of Mongolian students in Japan
3. 学会等名 The Sixth Academic Forum of Mongolian Researchers in Japan
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ミヤグマル アリウントヤ
2. 発表標題 留学の成果とその達成過程での学びについて～モンゴル出身の（元）学生がどのように語っているのか～
3. 学会等名 第58回大会日本比較教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ミヤグマル アリウントヤ
2. 発表標題 在日モンゴル人留学生の留学の意義に関する研究～博士課程院生の留学経験の語りから～
3. 学会等名 第57回大会日本比較教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ミヤグマル アリウントヤ
2. 発表標題 モンゴルの教育制度・高等教育の質保証・モンゴル人学生モビリティ状況
3. 学会等名 独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ミヤグマル アリウントヤ、スキドルジ エルベグザヤ
2. 発表標題 海外でのロックダウンの現状：日本におけるモンゴル人帰国希望者の調査より
3. 学会等名 第3回総合研究フォーラム在日モンゴル人博士会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Myagmar, Ariuntuya
2. 発表標題 Japan as a destination of study abroad: What Mongolian students rate as important?
3. 学会等名 Comparative and International Education Forum 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Myagmar, Ariuntuya
2. 発表標題 Does the Purpose of Japanese Language Institution Students Differ from That of Other Type of Students, and Why? In a Case of Mongolian Students in Japan.
3. 学会等名 World Education Research Association Focal Meeting in Tokyo 10th Anniversary (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ミヤグマル アリウトヤ
2. 発表標題 在日留学生に関する調査：日本語教育機関におけるモンゴル人留学生の留学経験に焦点を当てて
3. 学会等名 第55回大会日本比較教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ミヤグマル アリウトヤ
2. 発表標題 モンゴル留学生の送り出し政策とその意義;在日モンゴル人留学生の調査結果に基づいて
3. 学会等名 国際教育研究フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Myagmar, Ariuntuya
2. 発表標題 Student Mobility: From the results of Mongolian student survey in Japan
3. 学会等名 The Second Academic Forum of Mongolian Researchers in Japan
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ミヤグマル アリウトヤ
2. 発表標題 日本在住モンゴル人留学生のモビリティー研究～ 何を、また何故今なのか ～
3. 学会等名 第3世界教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Myagmar, Ariuntuya
2. 発表標題 MOBILITY ISSUES OF MONGOLIAN STUDENTS ABROAD (JAPAN): WHAT IS IT & WHY NOW?
3. 学会等名 Hokkaido-Mongolia Association
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ミヤグマル アリウントヤ
2. 発表標題 日本在住のモンゴル人留学生に関する研究～近年のモンゴルの高等教育政策における「海外留学」に着目して～
3. 学会等名 第53回大会日本比較教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Myagmar, Ariuntuya
2. 発表標題 Higher Education Reform in Mongolia and Students' Mobility in Japan: Between Reality and Imagination
3. 学会等名 The First Academic Forum of Mongolian Researchers in Japan
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 ミヤグマル アリウントヤ その他(著) 児玉谷史朗; 佐藤章; 嶋田晴行(編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 270
3. 書名 『地域研究へのアプローチ：グローバル・サウスから読み解く世界情勢』第14章「国家再編成における教育政策と国際支援--モンゴルの事例から」	

1. 著者名 Myagmar Ariuntuya (訳)、佐藤仁(著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Munkhiin Useg Printing	5. 総ページ数 294
3. 書名 『トップ大学は何をもってトップなのか? University of Tokyo & Princeton』 (?University of Tokyo & Princeton)	

1. 著者名 Ariuntuya Myagmarその他 (著)、Ganzorig, Dその他(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Ulaanbaatar Press	5. 総ページ数 256
3. 書名 学ぶための学び() 「各国の留学生受け入れ政策：海外におけるモンゴル人留学生たち」 pp.113-121	

1. 著者名 Ariuntuya Myagmarその他 (著)、Ganzorig, Dその他(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Ulaanbaatar Press	5. 総ページ数 256
3. 書名 学ぶための学び() 「各国の留学生受け入れ政策：海外におけるモンゴル人留学生たち」 pp.145-152	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ミヤグマル アリウントヤ (監修) (2021) 「高等教育・質保証システムの概要 モンゴル(2021年)」独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構 (36)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------